

復興への挑戦

元気カンパニー

陸前高田に定期訪問を続ける移動鍼灸院



「この国の住人は、本来は、助けあい、信頼しあつて生きてきたはず」と話す須藤氏。

そこで鍼灸治療をさせてほしいと申し出たところ、その場でOKしてくれて、そのまま現地でテントを買って、即席の鍼治療院を開きました」

実は、須藤氏はチャンスがあれば針を打つつもりで、道具を持参していたのだ。

「鍼灸は、針と消毒剤さえあれば、何処でも治療できる」と須藤氏もともと、そこに魅かれて、鍼灸師になったという。約35年前、釧路を飛び出して、京都の大学に入学、探検部に所属して、「世界中を見て回った」という須藤氏。その際に、バングラディッシュで、日本人医師が現地の人びとに信頼されながら、生き生きと働く姿を見て「じゃあ自分は医師以上に身軽に、いつでも世界中で仕事ができる鍼灸師になろう」と思い至ったという。

杏園堂を開業して23年目、10年前からは年1回のペースで、ケニアで医療支援をする釧路のグループにスタッフの派遣もしてきた。2007年7月に起こった新潟県中越地震の際も、同院のスタッフがボランティア活動に参加するかたちで、現地で鍼灸治療を行っている。

だから「院内はもとより、地元でも、今回の活動は自然なこととして受け止めている」という。初回訪問で、継続的な治療を決心したものの、

北海道釧路市の北部、豊かな自然環境の代名詞である釧路湿原のすぐ傍らにある「杏園堂鍼灸院」。同院は、約2年半にわたり、東日本大震災の被災地での定期的な鍼灸治療を無償で行っている。

震災から約4カ月後の2011年7月、院長の須藤隆昭氏は、被災地を訪れた。「誰もが、僅かでも被災された方々のお役に立ちたい、と思っていた時期、自分たち鍼灸師の出番もあるのでは？と、様子を伺いに行った」という。しかし、惨状を目の当たりにして、直ぐに活動に入るべきと確信する。

「僕は中小企業経済同友会釧路支部に在籍しているのですが、同支部支部気仙部会が、大きなドーム型のテントで朝市を始めたところでした。

もつとよい環境で、低コストで、定期的な治療を続ける方法を思案していたところ、地元の知人夫婦が「使ってほしい」と、キャンピングカーを無償で貸してくれ、さらに看板店が無償でペイントしてくれた。

冬を除いてほぼ毎月、当院のスタッフや、元スタッフたちが現地を訪れ、今までに治療した被災者はのべ約800人になる。「心待ちにしてくださる方も増えました。少なくとも数年は継続し、被災地で開業されていた鍼灸師さんが再開業されるまでは続けたい」と意欲を語る。

普段は岩手の中小企業同友会の方が無償で貸してくれている駐車場に停めてある移動治療車「さとうりご」

北海道釧路市
杏園堂鍼灸院

